

答 礼 訪 問 報 告

2007年5月3日～7日

なお続く枯葉剤被害 新たな「枯葉剤」劣化ウラン弾 ＝ベトナム訪問記＝

Mr. Nguyen Duc 招請委員会
副委員長 平石 昇

2005年3月19～27日の9日間、グエン・ドクさんら3名が来日し、中央公会堂での講演など、大阪で平和と枯葉剤被害をおおいに訴えた。

NPO MOAは、この答礼として5月3日～7日の5日間、加来・奥野共同代表を中心にベトナム・ハノイ市及びホーチミン市を15名で訪れた。

午後3時頃、タンソニャット空港に降り立ったとき、湿気を大量に含んだ熱風がどつと身体に吹きつけてきた。日本の真夏より暑い38度ということだった。

翌4日、最初の訪問地であるホーチミン市の、ベトナム南部では最も大きい産婦人科病院で、ベトちゃん、ドクちゃんの生まれたツーザー病院を訪問した。ここには来日した副院長のチュイ女史、平和村リハビリ課長のタン女史、そしてグエン・ドクさんが職員として働いている。

ツーザー病院のベッド数は1,000床だが、入院患者は常時約1,500人おり、小さめのベッドを置いたり廊下を使うなどして、やりくりしている。ホーチミン市では、妊婦の約3割に妊娠異常がある。院内の一部を見せて貰ったが、確かに人で溢れていた。最近、8階建ての新病棟が完成したが、とても追いついていないという印象だった。

標本室を訪れた。前回の訪問時もそうだったが、大量に並べられている異常出産児のホルマリン漬けは、ショッキングな光景である。今でも1日平均2人の奇形児が生まれているというダイオキシンの猛毒性には、恐怖を禁じ得ない。そして、ダイオキシンをベトナム各地に大量に散布し、未だに謝罪もしなければなんの補償もしないアメリカには、激しい怒りを感じる。

「真摯な謝罪も補償もしない」という国はアジアのどこかにもあるが、両国の体質は似ているが故に同盟国たり得ているのか？などと言いたくなる。

ホーチミン市とは1日でお別れ。じつは前日の夜、数人の団員がドクさんに知っている店への案内を頼んだところ、ドクさんが連れて行ってくれたのは、なんと、ミラーボールが高速回転(?)し、演奏もけたたましいディスコ。翌日、ドクさんに、昨夜はおもしろかったねと言いつつ(言葉は通じていない?)、踊る仕草をすると、彼は「シッ」と口に指をあてて、私のそれ以上の話しを遮った。発見! ドクさんはディスコが好きだったのである。

ハノイでは、解放30周年の記念行事の終了直後ということもあって、ホーチミン市以上に、車道や歩道上に多数の横断幕や旗が掲げられ、静かなたたずまいの街中に華やかさを彩っていた。

前副大統領で、ベトナム戦争中は“アオザイの闘士”として名を馳せたグエン・ティ・ビン女史の事務所を訪れた。そこではビン女史を先頭に、前在大阪総領事らの要人数名が、

私たちを歓迎してくれた。ビン女史はまず、日本における集会の成功とMOAの継続的な枯葉剤被害者支援に謝意を表明された。そして今後の活動として、アメリカにおける裁判の不可解さを含んだ敗北にめげず、新証拠を集めて裁判を継続すること、そして世界中からの支援を訴えられた。

加来代表はこれに、MOAで支援のための基金を作りつつあることや日本における平和人権センターなどへの署名の働きかけが前進しつつあることを述べた。

その後、ベトナム枯葉剤被害者協会を訪問した。ここではベトナムにおけるフランスとアメリカの2大国と闘ったジェンさん（男性）らが私たちを歓迎してくれた。ジェンさんは、ベトナムでは日本-フランス-アメリカと40年間、戦争が続いた。中でもアメリカが散布した枯葉剤（ダイオキシン）の被害で村が壊滅し数万人の人々が破壊された、彼らは今でも貧困を極める生活を送っていること、アメリカでの裁判を継続すること、世界中の支援が必要なことなどを訴えられた。

ベトナム要人の枯葉剤被害者支援の要請内容は、誰もがほぼ同一である。

NPO MOAは、日本において枯葉剤被害者支援活動を継続していきますので、組合員や家族の皆さんが、この問題への関心を高め、物心両面で絶大なるご協力をいただきますよう、改めて要請する次第です。また、アフガンやイラクで平然と劣化ウラン弾を使用し、新たなドクさん・ベトさんを作りだした。

アメリカと、アメリカに追従する日本政府に強い怒りを向け、真の平和＝世界中の誰もが安心して人間らしい生涯を送ることのできる環境と権利とを創り出すために、遠い道のみではあっても、共に奮闘しようではありませんか。

ベトナム訪問記 癒えない戦争の傷跡

北村 智子

飛行機の窓から眼下に広がるのは一面褐色の大地。山や川、緑の森といった単純な風景を想像していた私は少々面食らった。そうここはベトナム。褐色の大地はかつて見た「地獄の黙示録」や「プラトーン」などのシーンを彷彿とさせる。そしてホーチミン空港に到着した私たちを迎えてくれたのは、湿気を含んだ東南アジア特有の熱風とグエン・ドクさんの笑顔だった。

5月3日～7日の日程で3月に来阪されたドクさんやツーズー病院の方々をはじめ関係団体のみなさんへの答礼訪問に同行した。初めてのベトナム訪問。それは新鮮な驚きと学ぶべきものを私に与えてくれる旅だった。



ベトナムの街は訪問初日から目を見張ることばかり。まずは街中にあふれる赤旗と幟だ。解放30周年を祝う行事で街を飾っていたものだが、メーデーや春闘の決起集会など特別な場所以外では赤旗を目にすることがなくなってしまった私たちにとって、日常にとけ込んでいる鮮やかな「赤」は新鮮そのもの。

そして道路を縦横無尽に走るバイクたち。自動車一般市民までまだ普及していないこの国では、交通や運搬の手段としてバイクが重宝されていると聞いていたものの、実際の場面を見なければそのすごさは実感できるものでない。人の背丈ほどもあるガラス、バイクより長いパイプ、幾重にも重ねた大きなかごなど、とうていバイクで運べるとは思えないありとあらゆるものたちが軽々と運ばれていく。そして夜ともなれば、バイクというバイクが夕涼みを

兼ねて街中に繰り出す。その様子は圧巻の一言。ふたり乗りはもちろん、3人、4人、中には5人乗りといった強者も混雑の中を走り回る。ひっきりなしにならされるクラクション、目にしみるような排気ガス。そんな騒々しさも経済発展著しいこの国のパワーの証に見えた。

街の中心部には大きく立派なビルやホテルが建ち並び、人々でにぎわう通りには観光客の姿もちらほら見える。あちらこちらで進む建設工事は日進月歩で街の表情を変え、ずらりと商店が並ぶ通りや食欲をそそるさまざまな食べ物の屋台たちなど、街中が活気に満ちあふれているベトナム。きっと日本の高度経済成長期もこの街と同じ空気が流れていたんだろうとなにかしら共感めいたものさえ感じた。

そんな経済発展は、人々の暮らしを向上させ貧しさからの脱出を徐々に実現しつつある。そしてそれに比例するかのように生まれ変わる街では、かつての痕跡を見ることがむずかしい。だが、30年前までベトナム戦争という大きな悲劇がこの場所で、この国であったということは紛れもない事実。それを痛感させてくれたのがツーズー病院の訪問だった。

枯れ葉剤被害については新聞や書物で多少のことは知っているつもりだった。だが3月の集会で今もなお延々と続く被害の連鎖の実態を知り、さらにツーズー病院で具体的に「枯れ葉剤被害」と接触し、その被害の大きさに愕然とした。不妊、流産、死産、そして障害を持ち生まれてくる子どもたち。医療関係者の身を粉にした努力でさまざまなケアが実現されているものの、まだまだ援助不足であることも実感。

なかでも「平和村」で暮らす子どもたち。大きな障害を抱えていながら、日本の子どもたちが失いかけている瞳の輝きを持ち、生き生きとした表情がまぶしい。彼らひとりひとりの将来を支えることが今どれほど重要なことか、私たちの小さな力でいったい何ができるのかと考えさせられた。病院スタッフの献身的なケアで日常生活には支障をきたすことはない彼らだが、少しでも障害を克服するための医療的、精神的援助、また自立に向けたプログラムなど、人間として尊厳を持った生き方を実現するためのさまざまな援助を必要としている。もちろんMOAの活動はそのためのものだ。では私自身にいったいどのようなことができるのか。もちろん私の力などたかがしれている。しかしたとえ大海に一滴の水を投じるようなものであっても、「平和村」の子どもたちに思いをさせ、何らかの行動を継続し続けることが求められていると深く感じた。

何十年、何百年続くか分からない枯れ葉剤被害の連鎖。アメリカは自国の責任を放棄したまま振り向こうとはしない。そんなアメリカ政府に対して枯れ葉剤被害の実態を訴え続けることも大事だろう。そしてベトナム戦争は過去のものではなく、今なお枯れ葉剤被害という形で再生産され続けているということも訴え続けなければならない。そのためにも知り続けること、学び続けることがまず第1歩だと思う。そして「知らなかった」ですませることができない大きな「事実」を目にした経験を大事にし、私は私なりの形で方法でこの「ベトナム」を語り続けていかなければならないと実感している。これからが本当のベトナムとの出会いなのかもしれない。

最後に、重い事実を突きつけられる場面もあった今回の旅。しかし4泊5日の初めてのベトナムを最初から最後まで楽しく愉快地そして元気に過ごすことができたのはMOAの仲間の皆さんたちのおかげ。心から皆さんにありがとうと伝え、感想の終わりとしていたい。

ベトナム答礼訪問団報告

Mr. Nguyen Duc招請委員会
黒川洋匡

NPO MOA は、グエン・ドクさんをはじめスタッフの招請にあたりご尽力いただいた関係団体へのお礼、NPO MOA ハノイ事務所の激励のためにベトナムを訪問しました。

再開

やわらかい日差しと心地よい春風の中、5月3日、関西国際空港に集合した訪問団は、答礼訪問の成功と無事に帰国することを確認しあいながら出発式を終え、一路ベトナムへ旅立ちました。5時間後、大きな雲の中を抜けるとベトナムの街並みが見えてきました。

タン・ソン・ニャット国際空港に到着した訪問団をドクさんとタンさんが笑顔で出迎えてくれました。訪問団は再会の喜びとともに、強い日差しと暑さにベトナムへ到着したことを実感しました。



ベトナムの人口は8,000万人。戦争の影響もあるのでしょうか、35歳以下の人口が60%を占めています。86年のドイモイ政策導入後、97年までは10%の経済成長を誇り、同年のアジア通貨危機により成長率は落ち込んだものの、現在でも7%という高い成長率を維持しています。食べるのが精一杯という生活から少し余裕がでてきて、生活文化も変わって

きているそうです。ちなみに、バイクは日本、ファッションは韓国がはやりだそうです。

バスに乗り込みホーチミン市へ。フランス植民地時代の歴史をしのばせる建物がならぶ市内には、4月30日の南ベトナム解放30周年、ホーチミン生誕115年を祝い、赤いベトナム国旗がはためいています。

経済の中心地であるホーチミン市は、人口700万人。多くの人々が地方から集まっています。バイクの保有台数は、約330万台。2人に1台という保有率をあらわすように、道路には、たくさんのパチンコ玉を転がしたかのように、バイクが走り、信号待ちの時には、マラソンのスタート前のランナー達のように隙間なくバイクが並んでいます。

ツーザー病院へ

5月4日、私たちは、ツーザー病院へ向かいました。ドクさんのバイクに先導され、私たちのバスはたくさんの人で溢れている病院の敷地内を進みました。チュイさん、タンさんらが私たちを出迎えてくれました。

ベトナムの病院は、ほとんどが国営となっています。ツーザー病院は南ベトナムで一番大きな国立病院です。医療従事者の養成とともに、外国の医療機関と協力しながら研究もおこなっています。ベッド数は1,000床ですが、実際は小さめのベッドを置いて床数を増やし、現在1,500人が入院しています。



ツーザー病院は、数ヶ月前に8階建ての新しい病棟が建設されました。医療スタッフは、医師1,200人、看護師が500人となっています。

産婦人科が専門である同病院では、昨年44,000人の子ども達が生まれ、500人が死亡しています。また、4,200人が早産、4,000人が未熟児で、出生後に死ぬ確立は10.9%。また、700人の子どもが、何らかの障害をもっています。障害をもった子ども達について世代をさかのぼり調査すると、枯葉剤の影響による遺伝的なものであることが判明し、住んでいた地域と障害の関係が浮き彫りとなっています。こうした調査・研究とともに、脳に障害のある子ども達の発育にあわせた治療をおこなっています。



ツーザー病院の説明を受けた後、施設内を案内していただきました。新病棟の1階受付を通り、エレベーターで8階へ。8階は、不妊治療、体外受精をおこなっています。そして、3階の入院患者用特別室、2階の手術室を案内していただきました。その後、旧館へ。ベッド数の不足をあらわすように、たくさんの患者さんが廊下で横になっています。新生児室、教室、パソコン室、タンさんの執務室、ドクさんの事務室も見学させていただきました。

手術室を案内していただきました。その後、旧館へ。ベッド数の不足をあらわすように、たくさんの患者さんが廊下で横になっています。新生児室、教室、パソコン室、タンさんの執務室、ドクさんの事務室も見学させていただきました。

枯葉剤被害の現実

ひっそりとした、飾り気のない部屋へと案内されました。他の部とは違う時間が流れているようです。壁には、整然と大きなホルマリンのビンが並べられています。ビンの中には、赤ん坊の姿が。生々しい枯葉剤被害。そのむごさに、言葉を失い、目をそむけたくなるような気持ち。

時間の止まった小さな世界の中で、彼らは、これから何十年、何百年と枯葉剤被害を語りかけていくことでしょう。

この子ども達が、どのような今を生きていたのかと考えた時、目頭が熱くなりました。彼らの姿を写真におさめ、平和の祈りをささげました。心の中に重たいものを感じながら。



子ども達との交流

ベトさんの部屋も案内していただきましたが、残念ながら、ベトさんは、この時、寝ていました。



続いて、脳に障害を持つ子ども達の部屋を訪ねました。言葉も通じない中で、どのようにコミュニケーションをとろうかと悩んでいるところで、大阪で度々登場したぬ・い・ぐ・る・み。暑い中、ピカチュウとドラえもんに着替えます。子ども達の反応はどうかというと、不思議そうに見つめていましたが、あまり反応はありませんでした。しばらくすると、かすかに笑顔を見せる子ども、ピカチュウの尻尾をつかむ子ども。心のふれあ

いみいたいなものを感じた時、さっきまでの心の中の重たさが軽くなりました。

ツーザー病院の視察を終えると、敷地内のレストランで昼食をご馳走していただきました。昼食をまじえた楽しいひと時も、あっという間に過ぎ、別れを惜しみながら、私たちはハノイに向かうため空港へ出発しました。

ハノイへ

タン・ソン・ニャット国際空港を飛び立ち数時間、緑の田園に浮かぶノイバイ国際空港に到着しました。

空港を降り立つと、大きく真っ赤な夕日が、地平線の向こうに沈もうとしていました。空港には、NPO MOA ハノイ事務所の浅田さんと川村さんが、出迎えてくれました。空港から市街地へ向かう道路沿いには、「TOYOTA」「YAMAHA」「FUJITSU」「HONDA」の看板が立ち並び、日本とベトナムの経済的つながりを感じさせます。

ホテルに到着してから、バスでレストランに向かいました。レストランでハノイ事務所の浅田さんと川村さんから活動の現状について、少しお話をさせていただきました。

NPO MOAハノイ事務所の近況



ハノイの住宅不足と法律上、外国人が住宅を借りることができないという事情も重なる中で、活動の基盤となる事務所を開設できたことは大きな意味を持つものです。それもこれもNPO認証取得ができたからです。

現在、私たちは日本語を教えることを通して、ベトナム語に慣れ親しみ、人々と交流をはかっています。

今後の具体的活動について、スタッフが私達2人で進めるには人手不足です。でも認証取得をすることができた今、活動の幅が広がりつつあります。具体的なとりくみについては、みなさんとともに走りながら考えていきたいと思います。



世界遺産のハロン湾へ

5月5日、朝食を済ませた私達は、世界遺産に登録されているハロン湾へ向かいました。

途中、ベトナムに来て初めて線路を発見。しばらく線路沿いに走っていると、やがて列車が見えてきました。過ぎていく時間をかみしめるように、ゆっくりと進みます。ハノイからハロン湾まで列車で7時間、ホーチミン市までは1週間かかるそうです。ちなみにバスだとハロン湾まで5時間、ホーチミン市までは3日間です。

しばらくすると、バスのまわりには田園風景が広がり、牛の親子が歩き、用水路ではアヒルが泳ぎ、なんともどかな風景です。緑の向こうには、ラクダのコブのような山が並んでいます。

出発から2時間程して、休憩をとりました。休憩場所では、民芸品の刺繍の製作実演や販売がされていました。こうした販売所は他にもあり、政府の障害者就労・自立支援策として進められています。



ハロン湾に近づくと周辺では、リゾートマンション建設が計画されているようで、埋立てが進んでいます。やがて、ハロン湾に到着しました。世界遺産に登録されているだけあって、たくさんの観光客が集まっています。何十隻もの船が、港に停泊しています。船に乗り込み、沖合いへ。中国・桂林のような奇岩が見えてきました。自然がつくりだした雄大な風景に、旅の疲れも少し癒されました。

グエン・ティン・ビンさんとの交流

5月6日、前国家副主席のグエン・ティン・ビンとお会いしました。訪問団は緊張した面持ちの中で、ドクさんらの招請にかかわる協力に対するお礼と一連の事業の報告を行いました。

○グエン・ティン・ビンさん

「本日は、みなさんにお会いできて本当にうれしく思います。大阪で開催された「平和の集い」が成功したというのを聞き、私も喜んでいますが、私も集会に参加したかったのですが、パリで開催されたベトナム枯葉剤被害者に関する国際会議に参加しなければなりませんでした。

パリの国際会議は成功をおさめました。当初の予定を大きく上回る300名が参加し、世界中から有名な研究者や法律家が集まりました。残念ながら、会議の前日に、アメリカで行われていた枯葉剤を製造した化学会社に対する裁判が棄却されました。このニュースにパリの会議は、さらに盛り上がりました。会議の参加者は、アメリカの姿勢、態度を批判していました。

現在、裁判については、再提訴されています。この裁判は、容易ではないということをあらためて認識するとともに、新証拠を用意していこうとしています。ベトナム枯葉剤被害者協会では、証拠を集める一方、いろいろな国から支援を集めたいと考えています。

こうした枯葉剤被害者支援はもちろんのことですが、みなさんで広島・長崎原爆投下60周年記念をふまえた活動もされてみてはどうでしょうか。」



○加来共同代表

「NPO MOAを代表してあいさつをさせていただきます。まずは、一連のとりくみに色々ご協力いただき感謝申し上げます。残念ながらビンさんには参加していただけませんが、枯葉剤被害者協会のゼイン氏を派遣いただき、ありがとうございます。

本日はお忙しい中、この場を設定していただき、また、はげましをいただき感謝申し上げます。みなさんのご協力により、NPOの認証を取得することができました。一層活発に活動ができることに感謝します。

南ベトナム解放30周年を迎えましたが、ベトナムは、ベトナム戦争から独立を勝ち取り、色々な困難の中で発展し、平和を勝ち取りました。一方で、日本は第二次世界大戦時、加害と被害の立場を経験したにもかかわらず、反省することなくアメリカに追随し、アジ

アの中で侵略国家になろうとしています。侵略された歴史を持つ韓国、中国などからは大きな反発があります。これは当然のことです。ベトナムから見ても日本の為政者に違和感を覚えることでしょう。MOAとして、両方の経験を活かして、二度と戦争を繰り返して



はならないと考えています。子ども達のために平和をめざし、交流を深めるために活動している者として、怒りを持って抗議したいと思います。

ドクさんらの協力により、集会は成功しました。大阪で枯葉剤被害の実態とそれとたたかう姿を訴えることができました。ゼイン氏からアメリカでの枯葉剤裁判について報告していただきましたが、棄却決定に対する怒りを共有することができました。

今回のとりくみを活かし、安定的・恒常的な活動をめざしていきたいと思います。ビンさんが引き続き、国内外で活躍されることを願うとともに、MOAとしてもできることをひとつひとつ積み上げていきます。」

互いのあいさつの後、NPO MOAは今後の活動を報告し、ビンさんから活動に対する助言、ベトナムでの枯葉剤に関する運動と被害者支援の活動、枯葉剤による土壌汚染の状況について説明していただきました。

○グエン・ティ・ビンさん

「来年、ベトナム枯葉剤被害者協会では、ハノイで枯葉剤被害者支援のための運動を行う予定です。協会ではアメリカに責任逃れをさせないようにしようとしています。そのために、世界的な圧力をかけることができればと思います。もちろん、みなさんの活動も重要です。

アメリカでの裁判には時間がかかります。被害者が裁判の終わりまで待てるかどうか。早急な支援が必要とされている現実があります。

現在、協会では国内での活動とともに、国際的な活動も進めていますが、枯葉剤被害を受けた子ども達の支援をしていきたいと考えています。具体的には、顔の整形などです。ツールズ病院では、手術後のアフターケアの体制が整っています。今後、こうした施設をたくさんつくり、子ども達を社会に送り出せるように訓練していく考えです。

こうした活動以外にも、政府が枯葉剤被害者の生活支援のために一定の金額を支給しています。枯葉剤被害者に対する医療支援も大事ですが、枯葉剤がまかれた地域は貧しく、障害を抱え働くこともできないなど、資金援助が必要な生活状況にあります。こうした資金援助のための活動も協会ですべてとっています。

枯葉剤の土壌汚染の状況ですが、枯葉剤の影響が残っている地域はたくさんあります。ダイオキシンは、雨水とともに土壌に浸透しています。大量の枯葉剤が残る中部では、取り除くことも検討しています。戦争が終わって30年が経ちましたが、戦争が残した傷跡は、未だ回復できていません。

ビンさんと別れた私たちは、NPO MOAハノイ事務所を訪問した後、ベトナム枯葉剤被害者協会を訪問し、枯葉剤被害者の実情について、お聞きしました。

ベトナム枯葉剤被害者協会を訪問

枯葉剤被害者は、貧しい人々がほとんどです。ベトナム戦争を含め 40 年間戦争が続き、大きな被害を受けました。とりわけ、ベトナム戦争では、アメリカの爆撃によりひとつの町が焼き尽くされました。30 年が経ち、その痕跡を見ることはできません。しかし、いち



ばん危険なのはアメリカがまき散らした枯葉剤です。枯葉剤に含まれるダイオキシンは、80g を水道に流し込むと 800 万人が死亡する強力なものです。アメリカは、この枯葉剤を 336kg 使用しました。アメリカは、日本で原子爆弾を使用し、ベトナムでは枯葉剤を使用しました。自国でつくった爆弾を他国で試しているのです。残酷といわざるを得ません。ベトナムでは数万 ha という森林が大量に破壊されました。また、枯葉剤は、洪水により下流へと流され、海辺に住む人々にも大きな被害を与えました。

ダイオキシンは、体内に入ると抗体力を弱めます。神経に影響を及ぼし、記憶喪失など被害は体全体に波及します。流産、不妊症の女性や、顔が変形している子どももいます。枯葉剤の影響を受けた可能性のある女性を調査すると、母乳の中にダイオキシンが含まれていることが明らかとなっています。

枯葉剤による障害は、一般的な症状とは異なっています。日本からも研究者がベトナムへ来ていますが、脳のない子ども、唇が半分、アゴがくずれていたりします。政府も努力していますが、支援には限界があります。

ベトナムは、数十年戦争が続きましたが、国民は平和を望んでいます。アメリカと交渉し、枯葉剤被害に対する補償を求めています。アメリカ政府は積極的ではありません。

枯葉剤被害者たちは、アメリカのダイオキシン製造した化学会社を提訴しました。本年 3 月に棄却されましたが、枯葉剤の影響があると認められたアメリカ軍兵士に補償を認める一方で、ベトナム人には認めないというのは矛盾した決定です。

ベトナムの枯葉剤被害者は 300 万人から 400 万人おり、彼らのほとんどは貧しく苦しい生活を送っています。私たちにも彼らを支援する方法がまったくありません。枯葉剤被害者を抱える家族は、みんな枯葉剤の影響を受けていて働くことができる人がほとんどいないのです。政府の援助額も小さく、援助のみでは生活することはできません。

アメリカでの裁判は棄却され、現在、上告していますが、アメリカの裁判所が公正な判断をするためには、世界的な力が必要だということを感じました。

みなさんが、枯葉剤被害者支援の活動をしていることに敬意を表します。



ファン・カン・トゥさんとの再開

全ての日程を終え、限られた時間をそれぞれ思い思いに過ごしました。途中で降った夕立は、私たちの疲れを癒すかのような爽やかさを感じさせました。

ベトナムでの最後の夕食です。NPO MOA の設立当初から活動にご理解いただき、ご尽力いただいたベトナム・ユネスコ協会会長ファン・カン・トゥさん家族を招き交流を深めました。



ファン・カン・トゥさんからは、「1年半ぶりにみなさんにお会いできて、本当にうれしく思います。ハノイ事務所開設にかかわり、さまざま協力させていただきましたが、ベトナムと南大阪の友好が発展することをお祈りします。また、枯葉剤被害者支援の活動とともに、貧しい子ども達の支援のために活躍されることを期待します。また、何かお手伝いできることがあれば、ご協力させていただきます」と心強いあいさつをいただきました。

ベトナムでの再開を互いに喜び、訪問団の各参加者からの感想などを交えながら楽しいひと時を過ごしました。

答礼訪問を終えて

私達は、こうしてベトナムでの活動を終えて大阪に帰ってきました。

ベトナムで枯葉剤被害者支援にかかわる人々と出会い、日本でのNPO MOAの活動がどのように実を結んでいくのかということを感じ取ることができました。また、訪問団のように行き交うことが、活動をさまざまな方向に広げていくということも実感しました。その意味で、NPO MOAハノイ事務所の開設は、本当に意義深いものだと思います。

今回、初めて枯葉剤被害の実態を垣間見る機会を与えていただきましたが、ホルマリンのビンの中の子ども達、見えない枯葉剤による土壌汚染、どのような「正義」があろうとも戦争は悲惨で残酷で、その傷跡を癒すにはどれほどの時間が必要なのかということをおためて認識しました。

未来に生きる子ども達のために、今を生きる私達は何をするのかということをお突きつけられたような思いです。

